

にら収穫時抽だいを軽減する栽培体系の確立

1. 試験のねらい

にら栽培では、夏期の抽だいが夏にらの収量および品質を低下させるとともに、収穫調整作業時の花茎除去に多くの労力が必要とされることから、周年生産を行う上での大きな障害となっている。そこで、にらの周年生産の安定化を目的に、抽だい軽減栽培の体系化について検討する。

2. 試験方法

(1) 試験1 保温開始時期および品種が抽だいに及ぼす影響

平成18年3月14日に播種し、5月17日に定植した株を用い、保温開始時期を10月保温(10月26日)、12月保温(12月14日)および2月保温(平成19年2月16日)の3処理設定した。供試品種は、表-1のとおり、それぞれの保温開始時期で6品種とした。定植翌年の夏期に、収穫時の抽だい茎数および出蕾株率を調査した。

(2) 試験2 抽だい軽減栽培体系の実証

品種および保温開始時期の違いで、夏期の抽だい時期が異なることから、抽だいを軽減する栽培体系(図-1)を考案した。2つの作型と品種を組み合わせた周年生産で、収穫時の抽だいが軽減できるか否か実証した。作型1は、平成20年3月26日に定植し、10月27日すて刈りし(早期保温)、11月~1月および翌年の5月~6月で計6回収穫した。作型2は平成20年5月15日に定植し、翌年の1月23日にすて刈りし(晩期保温)、2~4月および8~10月で計6回収穫し、株当たりの収量を調査した。

3. 試験結果および考察

(1) 保温開始時期の違いで、収穫時の抽だい茎数および出蕾株率は明らかに異なった。抽だい開始時期は、保温開始時期が早いと遅くなり、保温開始時期が遅いと早くなり、品種間差があった(表-1)。

(2) 収穫時の抽だい茎数は、作型1では全ての品種で無く、作型2では、パワフルグリーンベルトが無かった(データ略)。周年栽培体系で、作型1は供試品種のいずれでも良く、作型2でパワフルグリーンベルトを用いれば、収穫時に抽だいが無い栽培体系が可能であった。しかし、パワフルグリーンベルトの合計収量は、供試品種の中で最も少なく、特に収穫1回目と6回目が少なかった(表-2)。これは、パワフルグリーンベルトの休眠が深いことの影響と考えられ、収量を向上させるには、すて刈り時期の再検討が必要であると考えられた。

4. 成果の要約

にらの抽だいは、保温開始時期が早いと遅くなり、保温開始時期が遅いと早くなり、品種間差がある。作型1(早期保温)で、スーパーグリーンベルト、タフボーイ、リッチおよびワンダーグリーンベルトのいずれかをを用い、作型2(晩期保温)でパワフルグリーンベルトを用いることによって、収穫時に抽だいの問題が無く周年生産が可能である。

(担当者 園芸技術部 野菜研究室 齋藤容徳)

